

家で、地域で、大人の「存在」感を見直す試み

明石 要一
(千葉大学大学院
教育学研究科教授)

家族の会話は、子どもが親の「座」、仕事と社会、人間関係、食文化などを知る絶好の機会

【これまでの研究から分かること】

(ア)親子だけでなく家族全体での会話が減っている。「個食」「孤食」の子どもが増えている。

- ・家族での会話が弾み、食が進む一家団らの機会を持つようにする。
例えば、晩酌をするためには、父親が夕食時に帰宅しなければ意味がない。
- ・一家団らの機会に、子どもと仕事や社会について会話をすることにより、親の苦勞を理解させたり、人間関係能力の習得の機会を与える。



(イ)子どもたちの放課後の世界—遊び仲間、遊び空間、遊び時間の三つの「間」を、地域で子どもの成長に合わせた第三の大人が用意する必要。

- ・子どもは「地域の宝」の再認識
地域にデビューした子どもをみんなが本気で面倒を見てきた。親が第一の大人、教師が第二で、地域の人は第三の大人である。
- ・幼児期の交換ホームステイ
気のあった者同士。子どもを交換し一週間他人の子どもの面倒を見る。第三の大人になる。子どもは「他人の飯」を経験する。人の家にいけばおりこうさんになる。返事ができお手伝いを進んでするようになる。
- ・一週間の通学合宿
小学校高学年が近くの公民館や青少年施設で一週間程度の宿泊体験をしながら、学校に通う体験。子どもたちが自分たちで衣・食・住の生活体験をする。大人は子どもたちを見守る第三の大人になる。

